

第4回

シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾

ともひさ
太田朝久

駒場集団の言説の誤り

本講座では、霊的集団「李勝哲・駒場久美子集団」の言説の誤りを取り上げます。彼らは、16万訪韓セミナーのみ言などを自分かかってに解釈し、自分たちの活動を正当化しようとしています。彼らの「誤った言説」を文鮮明先生のみ言を中心に正しながら、私たちが持つべき正統的な信仰とは何かについて説明します。KMS会員とAPT F会員は動画版シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾を、KMSウェブサイトで見聴できます。第1弾、第2弾も併せてご覧ください。(編集部)

七、「血統転換は、心情転換と所有権転換によって成される」と主張する誤り

駒場集団が作成した小冊子には、次のように書かれています。

「神様の愛と連結されるためには、外的には所有権転換を、内的には心情転換をしなければなりません。すなわち血統転換(100%)のために所有権転換(5%)という形状を通して、心情転換(95%)という性相を完全に変えなければなりません(駒場資料、一四八〜一四九ページ)」

駒場集団は、「心情転換」と「所有権転換」をすることで、「血統転換」が成されるかのように主張します。これは誤りです。真の父母様は、「聖酒式」および「祝福結婚」こそが、「血統転換」であることを何度も強調して語っておられます。

「真の父母様が許諾された聖酒式を通して血統転換を……真の家庭を探し立てることのできる道が大きく開かれました。」

……血統転換をして人類を再び神様の子女として探し立てる最上の方法は、交叉・交代祝福結婚です(『平和神経』一八六ページ九二二ページ)

さらに、真のお父様は、「血統転換は、墮落人間の努力ではできない」と次のように語っておられます。

「祝福は血統転換です。……血統転換が何かというと、アベルの母親(真の母)とその息子に接ぎ木する役事です。血統転換は、自分たちの努力ではできません(『ファミリー』一九九七年三月号、九二ページ)」

駒場集団では、「心情転換」と「所有権転換」をして、死んだ境地を経るならば血統転換ができるかのように主張しています

「母の国家になって使命を果たせば、お父様の内的心情と一体を成した人が現われて、重生の聖霊役事を真のお母様を代身して、するようになります(駒場資料、一三〇ページ)」

「重生」は、血統転換です。既に述べたように、真のお父様は、「血統転換とは、アベルの母親(真の母)とその息子に接ぎ木する役事である」と語っておられます。その重生役事を、真のお母様を差し置いて、代わりに行う別の人物が現れると述べることで自体、とんでもない主張です。彼らはこのように語り、真の父母様と関係のないところへ引張っていくので、十分注意しなければなりません。

『原理講論』に、「父は一人ですべて子女を生むことができるだろうか。墮落した子女を、善の子女として、新たに生み直してくださるためには、真の父と共に、真の母がいなければならぬ(二六四〜二六五ページ)」とありますが、ここで言う「真の母」とは、真のお母様(韓鶴子夫人)に

が、真のお父様は、次のように語っておられます。

「心情圏と心づもものは、皆さんがいくらか蕩滅し、いかなることをしたとしても駄目です。いかなる蕩滅の道を歩み、死んでから生き返るようなことをしたとしても、心情圏を連結させることはできません。心情圏はどこを通じるのかというと、血統を通じてのみ伝授されるのです。心情圏に接触するためには、血統的な転換過程を経ることなくしては、すなわち(祝福)結婚をしなくてはならないのです。ですから、血統転換式をするのです。そのようにしてその心情圏が連結されるのです(『真の御父母様の生涯路程』三七八〜三七九ページ)」

また、『本郷』のみ言集には、次のよう

にあります。

「血統を転換しなければなりません。……神の心情は元から相続されるものです。神から相続する。……神の心情を相続するためには、そのまま血統転換しなければな

りません。……蕩滅復帰は、血統を求めて、それから心情圏を求めていかなければなりません(『本郷』二〇九〜二一〇ページ)

真の父母様は、まず「聖酒式」や「祝福結婚」によって「血統転換」をして、それから「所有権転換」や「心情転換」をしていかなければならないと語っておられます。ところが駒場集団は、真の父母による「聖酒式」や「祝福結婚」が血統転換を成す道であることに一切触れようとしません。

この一点を見ても、駒場集団の言説は完全な誤りであり、み言と食い違っています。

八、「重生の聖霊役事を、真のお母様を代身して、別の人物が行う」と主張している誤り

駒場集団の資料には、次のように記されています。

「不平なしに全体がお父様と一つになった時、その日本で歴史的な聖霊のみ言が現れるようになるのです。そして(日本

ほかなりません。真のお父様は、お母様について次のように語っておられます。

「姉が、お母様（韓鶴子夫人）です。（祝福家庭の）皆さんは、妹の立場です。……お母様は姉の立場で天に侍り……母の立場に立って、妹の福を略奪するのではなく、天の国の福をすべて分け与えてあげるのです。ですから、（皆さんは）お母様の分身だということです……赤ん坊が生まれてくるときには、その赤ん坊は父親の細胞、生命の細胞である精子が母親のお



図1

なかの中に入っていく、母親の体を無条件に削って骨、肉、血を分配されたのです。そうして無条件に分けてあげて生まれたのが、妹です。真の父母様の妹です。それゆえに、血筋が一つになっています。……姉がだれよりも妹を愛し……天国に入っていくためのみ業に協力しているのです、これ以上ありがたいかたは、いないのです（『ファミリー』二〇〇一年一月号、一九ページ）

真のお母様（韓鶴子夫人）が「真の母」になる道は、極めて険しいものでした。真のお父様は、次のように語っておられます。

「来たるべき主の家庭はいかなる家庭でしょうか。悲惨というならば、それ以上悲惨な家庭がないくらい悲惨な家庭です。……そうでなくては蕩滅になりません。それゆえに、その新婦（真の母）が流さなければならぬ涙の種があるなら、それは歴史上の数多くの女性を代表した涙の種にならなければなりません」（『真の御父母様の生涯路程』④ 四八ページ）

す」（駒場資料、一四七ページ）
「…聖和式を生きている間にしなさい…」
（同、一五〇ページ）

駒場集団はこのように述べ、教会員に対して、「三日式」と称して徹底的に自己否定をさせ、所有権を全て捨てさせる三日路程を歩ませます。彼らは、このようにして死にけることが、「聖和式を生きている間にする」意味であると捉えています。

ところで、真の父母様は二〇一一年天曆



図2

十月（陽曆十一月）に「昇華」を「聖和」という名称に変えられました。その前年には「昇華祝祭」をされ、次のように語られました。【図2】

「人間は、誰彼を問わず、真の父母様を通じて重生、復活、永生の三段階を経て生まれてこそ、完成の人生を営むことができるようになります。……皆様には永生に向かう最後の段階がまだ残っているのです。……（それが）人間が完成して入って暮らす永生の世界、すなわち霊界です。……

『死』という単語は神聖な言葉です。悲しみと苦痛の代名詞ではありません。それで、レバランド・ムーンがその単語を『昇華（聖和）』と直して発表しました。地上界の人生を花咲かせ、実を結び、穀物を抱えて歓喜と勝利の世界に入っていく時が霊界入門の瞬間です。喜ぶべき瞬間です。

……永生を享受していく第一歩だからです（『トゥデイズ・ワールドジャパン』二〇一〇年六月号、六〇七ページ）

このように、「昇華」や「聖和」とは、

このような苦難を経て勝利され、「重生」の役事をなし得るおかたは、歴史上、たった一組、真のお父様（文鮮明先生）と真のお母様（韓鶴子夫人）以外におられません。【図1】

九、「生きて聖和式を行う」という意味を間違っして捉えている

駒場集団では、「生きて聖和式をしなければならぬ」ということを強調します。彼らの資料には、次のように記されています。

「人間が生まれ変わるためには、死を覚悟して神様を選択しなければならぬということです。神様と真のご父母様の言えない秘密というのは、すなわち『死んでくれ』という言葉だったのです。……霊的生をあきらめて肉的生を選択したのが墮落なので、復帰は墮落の反対の経路として霊的生のために肉的生をあきらめる覚悟が必要だということです。……全て捨てることができる、覚悟と選択が必要だということです。その方法が正に所有権転換という蕩滅方法なので

単なる「葬式をする」という意味合いのものではなく、永生に至るための「霊界入門の瞬間」です。したがって「聖和式を生きさせる」という意味は、霊界に合格する人間になつてから地上の生を終えていかなければならないことを示唆されたみ言であると言えます。

駒場集団のように、真の父母様による「聖酒式」や「祝福結婚」を抜きにして、「三日式」と称して自己否定をし、所有権を全て捨てるのが、「生きて聖和式をする」という意味ではありません。

このみ言は、私たちが祝福によって「血統転換」を成した上で、それから「総生畜献納」によって「所有権転換」を成し、さらには「心情転換」を完成してから霊界に行くようにしなければならぬことを意味するものです。

このように見えていくと、駒場集団の言説は、真の父母様のみ言とことごとく食い違っていることが分かります。